

社会的個人概念の再発見

——ポスト・フォードイズムの生産諸力——

齊藤 日出治

はじめに—ノマド的個人と社会的個人

わたしは『国家を越える市民社会』[1998]で20世紀の社会システムを動員社会として、つまり社会成員を資本と国家に動員するシステムとして総括し、このシステムが生み出した最大の生産力的成果が「ノマド〔遊牧の民〕的個人」とであると述べた。ノマド的個人とは、社会の生産諸力を自己の内部に蓄積した個人であり、社会システムに拘束されると同時にそのシステムから浮遊し自律する可能性をはらんだ個人である。したがってこの個人概念は社会の生産諸力がもたらした産物である。周知のように、マルクスは個人を社会から切り離して自存させるのではなく、個人を社会諸関係の総体的な作用の中でとらえた。生産諸力とは、この社会諸関係の総体的な力能にほかならない。マルクスはこの力能によって生み出される個人を《社会的個人》と呼び、資本制生産の発展がもたらす究極的な成果をそこに求めた。わたしがノマド的個人を「20世紀の資本と国家が生み出した最大の生産力的成果」(齊藤日出治 [1998] 13頁)と言うとき、念頭にあったのはマルクスのこの認識視座である。

本論の課題は、マルクスの社会的個人と現代社会のノマド的個人との関連を明らかにすることによって、個人の構築が社会形成のヘゲモニー闘争の主要な磁場であることを解き明かそうとするものである。

一 ブルジョア社会と社会的個人—私人と個体

近代社会は市場取引を媒介にして私的な諸個人が相互に交通する社会である。それはブルジョア社会と呼ばれる。マルクスはブルジョア社会を《現実的諸個人の行為とその物質的生活諸条件》として定義し、その総体を《交通形態》という概念で総括した。この交通形態には、生産・流通・分配・消費の諸過程が総体としてふくみこまれている。交通形態は、商業と工業の双方を、つまり流通と生産の双方をふくみこんだ概念なのである。

さらにマルクスは《生産諸力》をこの交通形態の力能として、つまり諸個人が営む物質的生活を通して獲得する社会的な力能として定義した。つまり、ブルジョア社会とは、そのような意味

での交通形態の総体的な概念である。

マルクスの唯物史観の基本概念は生産諸力と交通形態であるが、この二つの概念はブルジョア社会において成立する概念であり、したがってブルジョア社会と唯物史観とは不可分の関係にあることが明らかとなる。

「われわれはここに、ほかならぬ『市民社会』[ブルジョア社会—引用者] 認識そのものにおいて、『生産諸力』と『(生産=) 交通諸形態』という“唯物史観”の基礎範疇が獲得されたことに、注目しなければならない。」(平田清明 [1996] 242頁)

マルクスは《個人》を、交通形態と生産諸力によって構成されるブルジョア社会のなかに位置づける。ブルジョア社会は、たがいに自立した私的諸個人が物を商品として譲渡しあい交通する社会である。この交通を媒介にして、諸個人の私的諸労働がたがいに社会的な関係を結び、社会的な分業連関を形成する。交通の媒介によって、生産の連続性が確保され、再生産が遂行されて、ひとつの巨大な生産有機体が組織される。

近代ブルジョア社会においては、諸個人がたがいに自立し無関心で排他的な関係にある。だが諸個人はたがいに自立することによって、商品交換という物象の關係に依存し、この物象の關係を媒介にして全面的な相互依存の關係に置かれることになる。諸個人はみずからの私的所有物を他人に譲渡し、他人の所有物を領有することによって、事後的に社会的な關係を形成する。そしてこの社会的諸關係の形成を通して諸個人は社会的な存在になる。

だからブルジョア社会では、個人は二重の存在様態をとる。諸個人は直接には社会的個人たりえず、たがいに私的・排他的な存在であるが、市場取引を媒介にして事後的に社会性を獲得し、社会的個人となるのである。私的所有にもとづく社会は、各人の私的労働の生産物の譲渡にもとづく領有の關係を介して社会的にして個体的な所有であることを立証する。つまりブルジョア社会とは、交通諸關係を媒介にして社会性が事後的に確証される社会なのである。

したがって、マルクスの個人概念の独自性は、個人と社会を相互に切り離したり個人と社会の双方を実体的に自存させるのではなく、個人を交通形態を介した過程的統一性という社会諸關係の形成過程においてとらえるところにある。ブルジョア社会において、個人は交通を媒介した「構造的重層性=過程的統一性としての社会性」(平田清明 [1982] 75頁) という規定を受ける。

だがブルジョア社会が事後的に形成する社会的にして個体的な所有は、あくまで可能性にすぎない。なぜならブルジョア社会においては、物象の諸關係が自立して運動し、私的諸個人は物象の諸關係に従属し依存しているからである。諸個人がたがいに分離された存在であることをやめ連合した諸個人として共同の力で物象の諸關係を制御するとき、はじめて諸個人は社会的にして個体的な存在になることができる。諸個人がみずからをそのように組織してはじめて、諸個人はブルジョア社会において潜在的に育まれている社会的にして個体的な所有を現実のものにする。この現実化された社会的にして個体的な所有の社会を、マルクスは《社会主義》あるいは《 Kommunismus 》と名づけた。

こうしてマルクスは社会主義、あるいは Kommunismus を《個体的所有の再建》として定義する。

ブルジョア社会の原理である私的所有は、その原理が運動する過程において社会的な所有を行為的事実に実現する。私的な諸労働は交通を媒介にして事後的に社会的労働であることを立証する。また、直接生産過程の内部では、多数の勤労諸個人が協業、分業、機械制大工業という様式で協同労働をおこない、集合労働力を編成する。つまり、勤労諸個人の個体的な生産能力は、交通関係を媒介にして社会的集合労働者の結合された集合労働力として編成され、そのようなものとして実存する。資本制生産の下で事実上実現されているこの社会的集合労働力を基盤にして、勤労諸個人がみずからの個性性をとりもどす過程、これが社会主義である。

それゆえマルクスは『資本論』第一巻の「資本家の蓄積の歴史的傾向」の末尾で、労働者の私的所有と個体的所有を区別して、社会主義が資本主義時代に獲得された「協業と土地を含む生産手段の協同占有」を基盤にして、労働者の私的所有ではなく、「個体的所有を再建する」と語ったのである。

つまり社会主義とは、「勤労者の個体的な労働が社会的労働として直接に展開していく社会である」（平田清明 [1969] 108頁）。あるいは、社会主義とは「すでに勤労者の共同占有物になっている生産手段を、自覚的に共同の所有とし、各自の個体的活動を社会的活動として自覚的に構成する過程」（同書111頁）なのである。

マルクスは社会主義を、ブルジョア社会の彼岸に展望したのではなく、ブルジョア社会の内在的な批判として、ブルジョア社会の内部に潜在的に育まれる個体的所有を内実化していく過程として、提起したのである。

二 資本の生産諸力と社会的個人

—平田清明による『経済学批判要綱』の解説

資本制生産において、勤労者の個体的労働が社会的労働として展開していく過程は、資本の生産諸力が展開する過程である。この資本の生産諸力が編成される過程は、生産・交通・領有の社会的諸関係の複合的で重層的な構造によって媒介されている。

近代ブルジョア社会においては、資本の生産諸力が私的所有を原理として編成されているから、生産諸力は私的な個別性を保ったまま、多様な交通諸形態を媒介にして事後的に構造的な統一性を達成する。つまり、生産諸力は個別諸資本の生産諸力として私的に編成され私的に領有されると同時に、それらの生産諸力が交通諸形態を介して複合的・重層的に絡み合い、社会的総資本の生産諸力を生み出す。

資本の生産諸力は社会的総資本として総括されるが、この総資本は個別諸資本の総和から成り立ち、無数の私的諸資本の競争関係を通して統一される。だが、社会的総資本の生産力は個別諸資本の単純な総和を越えるものであり、交通諸関係に媒介された「有機体的力能」（平田清明 [1982] 69頁）として発揮される。

また個別諸資本は、協業・分業・機械制大工業を編成する生産過程において直接に社会化された集合労働の成果を資本の生産力として私的に領有すると同時に、その生産過程の生産物が総流

通過程を媒介にして編成される社会的総資本の生産力をいわばフィードバックして享受することができる。たとえば、個別企業はみずからが属する国民経済における産業の基盤整備（空港・道路・鉄道・港湾・工業用水路など）や科学技術や教育制度の総体的な生産諸力を活用することができる。

このような個別諸資本と社会的総資本の運動の過程的連関を通して、資本の生産諸力は重層的に編成され過程的に統一される。そしてこの資本の生産諸力という物象化された力能の背後には、労働者諸個人の個別的諸労働が社会的集合労働力として編成され資本の生産諸力として発現する過程が内包されている。この社会的集合労働力の編成過程は、労働過程の社会過程化が進展し、労働者の協業・分業編成が発展するとともに拡大し深化する。それは「ブルジョア社会に固有な共同的労働であり、この社会独特の『類的力能』である」（平田清明 [1982] 69頁）。そこには「ブルジョア社会において資本が意識的に形成する一種の共同態（Gemeinwesen）」（同69頁）が出現する¹⁾。また個別諸資本の集合労働力は、個別企業が生産過程の内部で組織されるだけでなく、総流通過程を媒介にして社会的労働過程における集合労働力としても総括される。

だがブルジョア社会の交通形態を媒介にして編成される集合労働力は、その直接の担い手である勤労諸個人自身によって領有されるのではなく、資本の生産諸力として資本家の私的所有に帰属する。そのために、個別諸資本および社会的総資本の巨大な生産力は、階級的な敵対関係を通して発現する。生産諸力は、一方では一国のGNPあるいは個別企業の経常利益の増大として立ち現れ、他方では労働者諸個人の個体的生産力の貧弱化・破壊として立ち現れる。資本の生産諸力の豊富化と労働者の個体的生産力の貧弱化との敵対関係が深化する。（たとえば長期不況下にある日本の主要企業が過去最高の純益を達成する一方で、労働者の雇用形態が不安定化し、パート・臨時工・季節工として低賃金で使い捨てられる、という事態は、資本の生産諸力の敵対的本性を端的に物語っている。）

この敵対的本性は、労働過程が科学的過程へと転化するとともにさらに激化する。なぜなら、教育・知識・科学技術などの知的生産能力は、社会的な共同労働と結合労働の成果であるにもかかわらず、それがすべて資本の私的所有物として個別の労働者に敵対する形で利用されるからである。労働過程の科学過程化は、労働者の直接的・個別的労働を資本の生産過程のたんなる付属品とし、それをますますみすぼらしいものにしていく。

だがこの敵対的関係の展開を通して、資本の敵対的本性をのりこえる主体が出現する。マルクスがこの主体のダイナミックな出現を明示的に論じているのは、『資本論』よりもむしろ1850年代に執筆した研究ノート『経済学批判要綱』（以下『要綱』）である。そしてマルクスの生産力概念とその内部矛盾から生ずる主体についての『要綱』のこの記述に着目した日本の経済学研究者が平田清明であった。

1) このようなブルジョア社会に固有な協同労働のポスト・フォーディズム時代における展開を、P・ヴィルノは「資本のコミュニズム」（Virno P. [2001] 211頁）と呼んだ。

平田がとりわけ注目するのは、労働過程の科学的過程への転化によって労働の機能が変質するという記述である。つまり、生産過程において科学的労働が発展し自然諸科学の技術的応用が進むと、労働者の直接的労働はもはや生産過程における主要因ではなくなる。

「大工業が発展するにつれて、現実的富の創造は、労働時間と充用された労働の量とに依存することがますます少なくなり、むしろ労働時間のあいだに運動させられる諸作用因の力に依存するようになる。そしてこれらの作用因それ自体がまた、それらの生産に要する直接的労働時間には比例せず、むしろ科学の一般的状态と技術学の進歩とに、あるいはこの科学の生産への応用に依存している」(Marx K. [1981] 邦訳489頁)。

したがって、生産過程において労働者はもはや主体として労働手段を駆使して労働対象に働きかける存在ではなく、生産過程のかたわらにあり、「生産過程それ自体に対して、監視者ならびに規制者として関わるようになる」。したがって「労働者は、生産過程の主要作用因であることをやめ、生産過程と並んで現れる」(Marx K. [1981] 邦訳489-90)。

このような生産過程の変容は、情報通信技術革命が進行する二〇世紀後半以降の資本主義における生産過程の現実をまさしく言い当てている。そしてこの言及に続いて、マルクスはこの変容が他人の労働時間の無償領有という資本制生産の価値規定を廃棄する物質的な基盤を用意する、と言う。

「現在の富が立脚する、他人の労働時間の盗みは、新たに発展した、大工業それ自身によって創造されたこの基礎に比べれば、みすぼらしい基礎に見える。直接的形態における労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は富の尺度であることを、……やめるし、またやめざるをえない。」(Marx K. [1981] 邦訳490頁)、と。

直接的形態での労働が富の源泉であることをやめ、それに代わって大工業それ自身が創造した基礎が、つまり科学的労働と自然諸科学の技術的応用が生産過程の主要作用因として立ち現れる。

だがこの富の新たな基礎は、じつは人間の労働が普遍的に展開したものにほかならない。それは「人間の個体としての諸力能の流動」(平田清明 [1982] 226頁)であり、生きた労働そのものの発現である。そして資本制生産においては、この生きた労働の発現は労働力商品の使用価値の発現である。したがって労働者の個体的労働力が資本によって商品として買い取られて流動化されるとき、労働が社会化され、個別的労働は社会的労働へと高められるのであるが、その過程は資本が購入した商品の消費過程であるがゆえに、資本による労働の強制的な管理の対象となる。したがって、社会的労働の担い手である科学的労働は「人間のもっとも個体的にして普遍的な活動であるにもかかわらず、……その普遍性を強制性のうちに解消し、労働の個体的＝自立的性格を無力化し萎縮させる」(平田清明 [1982] 227頁)。

そこでは、直接的労働が社会的労働へと高揚する過程と、資本がその社会的労働を強制しその成果を無償で私的に領有する過程が同時に進行する。そのために、労働者の個別的労働は無力なものにさせられ、社会的労働の成果は資本に帰属することになる。

それは生きた労働と対象化された労働（資本）との対立の究極的な展開を意味する。そしてこ

の展開それ自身が資本と労働の対立をのりこえる主体を潜在的に生み出す。これをマルクスはつぎのように語る。

「この変換のなかで、生産と富との大黒柱として現れるのは、人間自身が行う直接的労働でも、彼が労働する時間でもなく、彼自身の一般的生産力の取得、自然にたいする彼の理解、そして社会体としての彼の定在を通じての自然の支配、一言で言えば社会的個人の発展である」(Marx K. [1981] 邦訳490頁)、と。

こうして資本制生産過程の発展の極限に《社会的個人》が出現する。資本の強制労働という束縛がなくなると、労働者の個別的労働は普遍的労働と対立する無力な基礎であることをやめて、普遍的労働の展開そのものとなる。つまり「勤労諸個人自身の普遍的生産力の自己獲得」(平田清明 [1982] 229頁) が実現する。

資本の強制労働の束縛をとりはらって、労働者がみずからの個別的諸労働を普遍的労働として自己獲得するための闘争が、階級闘争であり、社会闘争である。それは、資本の強制下で進展する労働の社会化を基盤にして勤労諸個人がみずからを社会的個人として自己組織する闘いにほかならない。

「社会闘争—勤労諸個人が自分自身を社会的個人として再組織する闘争こそ、社会変革の原動力である」(平田清明 [1982] 253頁)。

平田は情報通信革命が進行し労働過程の科学過程化が急進展する1980年代初頭のフランスで、リップの時計工場の労働者がくりひろげる自主管理闘争のうちにこの社会闘争の今日的な展開を読み取った。そして、勤労諸個人が科学的労働をわがものとして獲得することによっておのれの個性性をうちたてるといふマルクスの社会的個人概念の現代的な証人をこの自主管理闘争に見いだす。平田は、リップの労働者、それを支援するカトリックの司祭、メディア、政党の動きのうちに、《社会的個人》、あるいは《連合する諸個人》という概念の証人を見いだしたのである。

三 社会的個人とコミュニズム

——アントニオ・ネグリによる『経済学批判要綱』の解説

平田清明が日本で1980年を前後して『経済学批判要綱』を丹念に解説しながら資本の生産力概念のうちに《社会的個人》を発見していたとき、ほぼ同時期にイタリアでこの概念に注目していた人物がいた。アントニオ・ネグリやパオロ・ヴィルノらのアウトノミア運動の思想家たちがそれである。平田が当時の資本主義の労働過程の変容と社会闘争の進展のうちにマルクスの社会的個人概念の証人を読みとろうとしたように、イタリアのマルクス主義者たちも、《労働の拒否》をスローガンに掲げるアウトノミア運動のうちに社会的個人の証人を発見する。

ネグリは、ポスト工業化の経済において労働の主要部分がしだいに知識・情報・文化・サービス・コミュニケーションによって占められるようになることに着目して、この過程が進展するとともに、労働時間が富の尺度基準であることをやめ、代わって社会的・集合的個人が富の基礎になると語る。

「労働がコミュニケーション的・言語的な形態で組織され、〈知〉が協動的な何ものであるとすれば、生産は、知的・言語的な労働を形成する結びつきと関係の統一、つまりこのような集会的個人にますます依存することになる」(Negri A. [2003] 邦訳98頁)。

この集会的個人は、資本にとって個別的労働者の直接的労働に代わる富の新たな源泉としてたちあられる。それはなぜか。資本制生産は他人の無償労働から剰余価値を引き出さなければならない。だがそのために資本が追求する活動は資本にとってディレンマをもたらす。それは、資本が剰余価値を極大化するために労働の生産性を高めて必要労時間を不断に短縮しようとするからである。必要労時間を短縮することは、充用される労働時間を減少させることを意味し、それは資本にとっての富の源泉を掘り崩すことになる。では、資本は労働時間の短縮による富の減少をどのようにして補うのであろうか。マルクスはその問いにつきのように答える。

「資本は、富の創造をそれに充用された労働時間から独立したものにするために、科学と自然との、社会的結合力と社会的交通との、いっさいの力を呼び起こす。」(Marx K. [1981] 邦訳490頁)

ネグリは『要綱』のこの一文を引用した後に、つぎのように述べる。資本は労働者一人一人の必要労働を減らす代わりに、必要労働の集合性を高め、その集合力を剰余価値の源泉にしようとする、と。

「個別的必要労働の圧縮は集合としての必要労働の拡張である。それは、生産する能力だけでなく、生産された富を享受する能力ももつ『社会的個人』を構築する」(Negri A. [1998] 邦訳269頁)。

必要労働の集合性を高めること、それは労働者が相互行為しコミュニケーションを活性化してみずからを集合的労働力として鍛え上げることを意味する。こうして生産の主体は、もはや個々の労働者の直接的労働ではなく、社会的活動の結合力そのものとなる。そしてこの社会的活動の結合力の担い手として社会的個人が出現する。

それゆえ、この社会的活動の結合力は資本にとっての富の新たな源泉であると同時に、社会的個人というコミュニズムの源泉をも呼び起こす。コミュニズムとは資本制生産の彼岸にあるのではなく、その足下にあるのだ。

「資本制生産の発展はコミュニズムの過程の転倒したイメージである。したがって、そのイメージは資本が進歩すればするほど、醜悪で狂ったものになってくる。対立が極点に達し、転覆しか活路が残されていないとき、協同的な人間労働はその再生を成し遂げる。」(Negri A. [1998] 邦訳290頁)

資本制生産においては、生産の成果が私的に領有されるという敵対的本性の下で普遍的・協同的な労働が発展する。だが普遍的・協同的な労働は資本にとって新たな富の源泉であると同時に、資本を廃棄する源泉にもなる。それはこの普遍的・協同的な労働の担い手として社会的個人が誕生し生成するからである。コミュニズムとは、このような生産諸力の解放とその担い手の強力な出現を意味する。

コミュニズムとは、「発展の諸段階の狭間で誕生する新しい集合的な個性の上のみ打ち立てられる」(ibid., 邦訳293頁)。

そしてこの新しい集合的な個性が、私的所有に代わる生産と発展の新しい規則を創出する。

このようにして、ネグリは平田清明と同様に、『要綱』のなかに資本の生産諸力の発展にもなって出現する「集合的個人」、「社会的個人」の概念を洞察し、この概念をコミュニズムの基盤に据える。ネグリにとって、社会的個人とコミュニズムは同義語なのである。

「コミュニズム革命、すなわち社会的個人の力強い出現」(ibid., 邦訳278頁)。

社会的個人は新しい自由の概念の担い手でもある。そこでは、個人は直接に社会的でありかつ個体的であるという意味において、真の自由を獲得する。だが資本制生産が発揚する《個人的な自由》においては、諸個人は直接に社会的な存在たりえない。諸個人は物象の諸連関に依存してみずからの社会性を立証するほかない。それゆえ自立した諸個人は物象の諸連関にみずからの個性を従属させることになる(消費者の個性がデザイン・ファッションによる商品のコードによってかきたてられる消費社会の状況がそれを端的に物語っている)。これに対して、コミュニズムにおける直接に社会的である個人は、物象の諸連関を諸個人の社会的な力能として制御し、その基盤のうえに自由な個性を発展させる。

四 ポスト・フォーディズムの非物質的労働における社会的個人の発見

ネグリは、ポスト・フォーディズムにおける生産過程の変容が社会的個人の強力な出現を促したことをとりわけ強調する。ポスト・フォーディズムにおける労働は、工場労働であれ、事務労働であれ、社会的な協同労働を多様化させ発展させる。しかもこの社会的な協同労働は、労働の指揮者あるいは管理者によって導かれるだけでなく、労働者自身による能動的な取り組みによっても推進される。つまり、管理者が個々の労働者を導いたがいに協力しあって共同作業に取り組むよう指導するだけでなく、労働者自身が能動的に他者との協働作業を追求するよう求められるようになる。今日では、かつてのフォーディズムの労働様式のように、労働者は個々ばらばらに指示された作業を遂行するのではなく、たがいにコミュニケーションを図り協調力を高めることが求められる。労働のなかでコミュニケーションや相互行為や言語表現が果たす役割が増大する。ネグリと同じアウトノミア運動の思想家であるパウロ・ヴィルノは、この労働の変容をつぎのように語る。

「労働的行動は、その言語活動的-コミュニケーション的本性を明確に示し、また、他人の眼差しへの露出を当然のこととして伴うものとなります」(Virno P. [2001] 邦訳111頁)。

その結果、ヴィルノは労働から「独白的性質が姿を消」(ibid., 邦訳111頁)し、労働がおしゃべりになる、と言う。

「今日では、労働は相互行為そのものです。労働過程はもはや寡黙なものではなく、むしろ雄弁なものです」(ibid., 邦訳204頁)。

こうして労働者が言語活動やコミュニケーションを通してたがいに関係する能力が、ポスト・フォードイズムの時代における資本の生産諸力の源泉となる。

「現代資本主義が人間存在の言語活動的-関係的能力のなかに、すなわち人間存在を特徴付けるコミュニケーション的で認知的な諸能力（デュナミス、力能）の総体のなかに、その主要な生産的資源を有している」（ibid., 邦訳183-4頁）。

マルクスが資本の生産力の源泉とした《一般的知性》は、今日では《大衆知力》として現れる。大衆知力とは「言語活動能力、学習へのやる気、記憶力、物事を抽象したり関連づけたりする能力、自己反省する傾向といった、精神のもっとも類的な諸性向です」（ibid., 邦訳207頁）。

この大衆知力を媒介にして労働の協働性が発揮される。その結果、ヴィルノによれば、労働は二つの大きな変容を被ることになる。ひとつは、J・ハーバーマスが提起したような労働と相互行為（コミュニケーション行為）との対比が意味をなくすことになる。労働は自然に働きかける目的合理的な行為であり、コミュニケーションは象徴や記号を媒介とした他者との相互行為であるという区別が消滅する。労働はいまや相互行為そのものになるからである。それは言い換えれば、ひとびとの相互行為が資本の価値増殖のための労働という制約のなかに封じこめられることにほかならない。

もうひとつは、労働の中に政治の要素が全面的に導入される。それは他者との関係行為を管理し統治する活動が労働において重要な役割を果たすようになるからである。労働の協働性を効率的に制御し協働の力を効果的に発揮させるための政治が重要な要因となる。こうして、「労働が政治化」し「もともと政治的行動に関係していたものが労働の領域に包括される」（ibid., 邦訳114頁）。したがって「（広義の意味での）政治が、生産力に、職務に、あるいは『工具箱』になる」（ibid., 邦訳112頁）。²⁾

マルクスは、ブルジョア社会が交通形態の媒介によって個別的諸労働を集合労働力として組織することを洞察した。だがポスト・フォードイズムの今日では、マルクスが個別的諸労働を集合労働として編成する媒介概念であった交通形態が、労働過程における直接的労働の要因となっている。交通形態がいわば労働過程の内部に直接入りこんでいる。ヴィルノはこのことを「<言語活動を有する>という特徴が、資本主義的生産の内部に包括される」、あるいは「人類発生その

2) 非物質的労働が、コミュニケーションや協働を進展させるよりも、むしろ労働の階層化と分断化を引き起こしていることをもって、ネグリらの現状認識の誤りが指摘されている（宇仁宏幸 [2003]）。だが労働の階層化や分断化が生ずるのは、非物質的労働において生ずる集合労働力を資本の価値増殖に向けて組織化する《労働の政治》が作用しているためである。この作用によって、労働過程におけるコミュニケーションや協働のなかに競争関係や支配関係がとりこまれて、労働者の協同労働が競争と敵対の関係へと誘導される。そして協同労働の成果が私的に領有される。

この点で、佐々木政憲 [2004] の指摘は示唆に富んでいる。佐々木は非物質的労働の出現が消費社会の展開と密接にかかわっていることを強調する。消費社会を編成する労働は、記号を操作しひとびとの欲望を誘導して、過剰労働社会をうみだすからである。消費社会の記号秩序の編成を通して、自由処分可能時間が過剰消費と過剰労働の時間へと回収されていく。

ものの現行の生産過程への含み込み」(ibid., 邦訳112頁)と表現する。

同じく、ネグリも今日の非物質的労働が直接に協働的な相互作用をふくみこむものであることを強調している。

「非物質的労働は、無媒介的に社会的相互作用と協働とを含んでいる。言いかえれば、非物質的労働の協働的側面は、それ以前の労働の諸形態のように外部から課せられたり組織されたものではなく、むしろ協働が完全に労働活動それ自体に内在的なものになっているのである。」(Hardt M./Negri A. [2000] 邦訳378-9頁)³⁾

五 生政治的生産

ネグリによれば、ポスト・フォードイズムにおける生産的労働はしだいに非物質的、知的、かつコミュニケーション的な性格を帯びようになり、その結果、そのような性格の労働力を制御するための政治理論が求められるようになる。そのために、コミュニケーションを制御したり象徴を操作したり情動を管理したりする《生政治的生産》の概念が浮上する。

この生政治的生産は、資本蓄積の進展にともなう膨大な非労働時間の増大を剰余価値の生産へと誘導するための回路としてとらえかえさなければならない。資本蓄積の進展は巨大な生産力を生み出すことによって、社会的な必要労働時間を短縮し、膨大な非労働時間を生み出す。それは可能性としての自由処分可能時間の増大を意味する。そしてこの自由処分可能時間こそが、社会の真の富であることをしだいに浮き彫りにしていく。

だが、資本制生産の枠内における自由処分可能時間の増大は敵対的な性格を帯びる。つまり、自由処分可能時間は、労働者にとっての労働時間の短縮および自己実現的な時間としてあらわれるのではなく、過剰労働時間の増大となって現れる。それは、「増加価値産出のための剰余労働時間」として、「寄生的支配者の非労働時間」として、「寄生的徒食者、追従者など不生産的諸階層の遊休時間」(平田清明 [1996] 276頁)として現れる。

生政治的生産とは、この自由処分可能時間として生み出されている膨大な時間を、労働者階級の自由時間としてではなく、資本にとっての過剰労働時間として組織する権力装置にほかならない。現代の資本は、このような権力装置なしに、市場メカニズムだけで資本の秩序を維持し資本蓄積を推進することはできない。

この権力装置は直接的生産過程を越えて、社会生活の全領域を包括する。とりわけ消費の領域がそうである。そしてこの権力装置をめぐるヘゲモニー闘争こそ、階級闘争の主戦場となる。

3) ネグリ、ヴィルノは、この集合労働がマルクスの交通形態概念を生産過程の内部に直接にふくみこむようになることを強調する。それは重要な視点であるが、その直接性を強調するあまり、集合労働力が交通形態によって複合的・重層的に媒介されていることを軽視してはならない。集合労働力は、媒介性と直接性の相互連関において、あるいは両者の相互浸透においてとらえられなければならない。

わたしたちは今日膨大な過剰労働時間が生政治的権力によって組織されているのを目の当たりにしている。先物取引をはじめとする投機的金融取引の時間、企業買収をめぐる株式売買操作の時間、報道メディアや映像産業が商品として売り出す膨大なスペクタクルの時間、文化産業・レジャー産業・旅行産業が組織する余暇時間、がそれである。

これらの時間は労働者にとって膨大な失業時間として現れる。長期不況下の日本では多くの若者が正規雇用の道を断たれ、フリーター、ニートとしての不安定な生活を余儀なくされている。マルクスは『資本論』において、資本制生産が生み出す独自の人口法則として、「相対的過剰人口」の創出を指摘した。そしてこの過剰人口の実存形態として、流動的・潜在的・停滞の人口、および非救済窮民を挙げた。フリーター、ニート、引きこもりの若者は、今日における相対的過剰人口の実存形態である。

マルクスは『資本論』第三巻で、利潤率傾向的低下法則の内的諸矛盾の展開として、生産諸力の発展が「革命を招来するであろう。というのは、それは人口の多数を遊ばせておくことになるからである」と述べている。今日の生政治的生産は、生産諸力の発展が生み出した膨大な人口を遊ばせておくのではなく、資本の価値増殖の契機として積極的に組織する。むしろそれが剰余価値の主要な源泉となる。

「生政治 (biopolitique)」という概念は、ミシェル・フーコーが近代的権力の特徴としてとりあげたものである。18世紀末から19世紀初頭にかけて人口を統治するために生そのものを管理する技術が発展したというのがフーコーの主張である。フーコーは、生が国家による公的な制御の対象となるとところに近代的権力の主要な特徴を見た。

これに対してヴィルノは、生政治の概念が労働力と密接不可分であることを強調する。労働力とは「人間の身体に宿る肉体的・精神的な諸性向の総体」(Virno P. [2001] 邦訳149-50頁)である。この諸性向の中には、言語活動能力、記憶力、運動能力、象徴操作能力などがふくまれる。とりわけポスト・フォードイズムの時代になって、労働力にふくまれる精神的・知的能力や美的感受性が重要な役割を有するようになった。このような多様な可能性をはらんだ身体が商品として売買される対象となっている。そのためこのような身体を管理する生の政治が課題となる。だからヴィルノは、生政治の起源が労働力という存在様態の中にあることを強調する。生政治の概念は、労働力に先立って存在するのでなく、労働力商品の出現とともに現れるのだ。

「資本家が労働者の生、労働者の身体に興味をもつのは、……この身体、この生が、能力、力能、デュナミスを含んでいるからです。生きた身体が統治の対象となるのは、その内的な価値が理由ではなく、生きた身体が真に重要な唯一のもの——この上なく多様な人間能力（話す力能、思考する力能、記憶する力能、行動する力能など）の総体としての労働力——の基体となっているからです。生が政治の中心に位置付けられるのは、非物質的な労働力が問題となるときです。そしてこの意味において、この意味においてのみ、『生政治』を語る事が許されるのです」(Virno P. [2001] 邦訳153頁)

それゆえ、まず《労働の精神的・肉体的な諸力能の総体》を商品として売買する過程があり、

「この出来事から生ずるひとつの効果」(ibid., 邦訳155頁)として、生政治が出現する。労働者の身体のデナムスを管理し統治する政治として、生政治が登場する。この生政治によってのみ、資本は個別労働者の集合労働力を統治し管理することができ、その成果を私的に領有することができるのである。この生政治が作動するがゆえに、個別の労働は資本の権威に服従し、貧弱な状態におとめられる。もしも労働者が生政治の管理の束縛から解き放たれるならば、労働者は集合労働力を共同で管理し、その成果をわがものとして領有するようになる。労働者の個別的労働は、生産的協働の成果を領有して豊かになる。だがそうすれば、資本にとっての剰余価値の源泉は消滅する。そのときマルクスが指摘するように、交換価値にもとづく生産は崩壊する。

生政治的生産とは、社会が資本の支配の下に実質的に包摂されることを意味する。それは「グローバル化した生産的秩序と同義」(Hardt M./Negri A. [2000] 邦訳456頁)である。それゆえネグリにとって、《帝国》とはグローバルな生政治的生産の秩序のことである。そこでは、いわゆる賃金労働者だけでなくあらゆる社会成員の身体が労働力という形式の下に全面的に動員され、管理され、統治される⁴⁾。だがこの動員が進めば進むほど、みずからの身体のうちを超個体的集合力をはらんだ社会的個人が発展する。ネグリがマルチチュードと呼んだこの社会的個人が、帝国の生産的秩序の最後の過程でたちあらわれる⁵⁾。かくして「マルチチュードによる生産諸力の再領有が生ずる」(ibid., 邦訳458頁)。その意味で、ネグリはマルクスが洞察した資本蓄積の歴史的傾向性を、ポスト・フォーディズムとグローバリゼーションの時代において読み取っているのである。つまり、《帝国》の歴史的傾向性を、《グローバルな社会的個人の出現》として、《グローバルな個体的所有の再建》の過程として読み取ったのである。

4) 筆者はルフェーヴルの『空間の生産』に言及しながら、資本が《生きられる経験》を空間の生産を通して資本の生産諸力として組織していく過程を経済学が看過していることを指摘した(斉藤日出治 [2003])。資本の蓄積過程は生政治的権力に支えられ、ひとびとの生そのものを組み入れることによってのみ存続が可能となる。だからこの過程の分析は既存の経済学の分析の枠組みを越えていく。社会成員の生そのものの営みを資本の生産諸力として動員する権力装置、これをネグリは生政治的権力と呼んで、その考察の重要性を強調したのではないだろうか。

5) ネグリやヴィルノらは、マルクスが『要綱』で提起した《社会的個人》の概念からマルチチュードの発想を引き出している。「私は、全ての『社会的個人』からなる総体をマルチチュードと呼びたいと考えています。」(Virno P. [2001] 邦訳147頁)

マルチチュードは個性・特異性・多様性を特徴とするが、それは資本が有する均質性に対抗して出現する社会的個人の特徴でもある。資本は集権的で均質な権力を保持するが、この均質性を解体し、多様性・差異・多数性を発展させる主体として《社会的個人》の概念が発見されるからである。

「社会的個人は多数性である。最大の差異の内包性こそ、コミュニズムへの最高のアプローチである。」(Negri A. [1998] 277頁)

結び 自己内省的個人と社会的個人

これまで検討してきたマルクスの社会的個人概念のポスト・フォーディズム的展開を踏まえて、冒頭に述べた《ノマダ的個人》の出現の意味を理解することができる。

自己内省力をもつノマダ的個人は、伝統的な集团的アイデンティティ（家族、地域集団、国家などの）から脱して、浮遊し流動化するアイデンティティにもとづく個人である。これらの個人は、いわば非物質的労働におけるコミュニケーションと協働の能力をみずからの身体に宿した個人である。この交通能力を内蔵しているがゆえに、個人は排他的な自己の殻に閉じこもって流動的なアイデンティティ形成をなしとげることができる。個人は自己ならざる諸要因を不断に取り入れながら、それらの要因との交渉を通して自己を解体し再構成することができる。そのような個人のアイデンティティは《フレキシブル・アイデンティティ》と呼ばれる。

このような自己内省的個人の出現は、資本・国家のような権力システムによる個人の身体への介入がもたらした産物である。今日では、システムの管理が個人の生物学的・感情的・象徴的な次元にまで及び、個人の動機づけや身体的な構造の領域にまで社会介入が進んでいる。高度に複合的なネットワーク組織が、この組織を機能させるために個人の行動資源を全面的に動員する必要に迫られるからである。

要するに、ノマダ的個人は、消費力としても、労働力としても、集合的協働を内包した個体概念であり、この個体は資本の価値増殖の基盤にもなれば、社会的個人の生成の場にもなりうるという両義性をはらんでいると言うことができる。この個人を資本の生産力として開発し資本蓄積を担う労働主体および消費主体として誘導するか、それとも物象への隷属を断ち切り諸個人が連合して物象の諸連関を制御する自由な集合的主体として自己形成をなしとげるか。このヘゲモニー闘争がくりひろげられる場がノマダ的個人にほかならない。それは社会から切り離された純粋な主観性の領域ではなく、社会闘争の主要なアリーナなのである。その意味で、ノマダ的個人の出現は、社会的個人の今日的な存在様態と言うことができよう。

《参考文献》

- Hardt M./Negri A. [2000] Empire, Harvard University Press. [水嶋一憲ほか訳『帝国』以文社]
 平田清明 [1969] 『市民社会と社会主義』岩波書店
 [1982] 『経済学批判への方法叙説』岩波書店
 [1996] 『市民社会論の古典と現代』有斐閣
 Marx K. [1981] Ökonomische Manuskripte 1857/8, Teil 2., Dietz Verlag. [資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集』「1857-8年の経済学草稿」第二分冊, 大月書店]
 Negri A. [1998] Marx oltre Marx, Manifestolibri. [清水和巳ほか訳『マルクスを超えるマルクス』作品社]

- Negri A. [2003] Guide: Cinque lezioni su Impero e dintorni, Raffaello Cortina Editore. [小原耕一/吉澤明訳 『<帝国>をめぐる五つの講義』 青土社]
- 斉藤日出治 [1990] 「個人の主体化=従属化と社会的個人」『物象化世界のオルタナティブ』 昭和堂, 所収
[1998] 『国家を越える市民社会』 現代企画室
[2003] 『空間批判と対抗社会』 現代企画室
- 佐々木政憲 [2004] 「非物質的労働とポスト資本主義」『QUEST』 No.34.
- 宇仁宏幸 [2003] 「『非物質的労働』概念について」『現代思想』 2月号
- Virno P. [2001] Grammatica della moltitudine, Rubbettino Editore. [広瀬純訳 『マルチチュードの文法』 月曜社]

The Rediscovery of the Concept of Social Individuality

Hideharu SAITO

Karl Marx discovered the social individuality, as opposed to the private individual, at the end of the development of bourgeois society in the 19th century. Nowadays, in 21st century, capitalism has attained production post-fordism. The production system of post-fordism is composed of the corporation of workers. It accelerates communication, dialogue and language activity between workers. Japanese Economist, Kiyooki HIRATA, pointed out the appearance of social individuality as the result of the transition of the labour process into the scientific process in the age of post-fordism. Almost the same period, before or after 1980, Antonio Negri and Paolo Virno in Italy focused their attention on the same transformation of labour process in post-fordism. They indicated the importance of politics of labour in organizing the collective force of workers as productive force of capital. They referred to this type of politics as bio-politic power.